

チャンキャ・ロルペードルジェ『知見の歌』研究序説

根本 裕史

1 はじめに

本研究の目的は、18世紀に活躍したチベット学僧チャンキャ・ロルペードルジェ (Lcang skya rol pa'i rdo rje: 1717–1786) —別名イシー・テンペー・ドゥンメ (Ye shes bstan pa'i sgron me) —の『知見の歌 (*Lta mgur*)』およびその註釈の解説を通じて、チベットにおける中観思想と文学の関わりを明らかにすると共に、ゲルク派と他宗派の間の対立と融合をめぐる問題について考察を加えることである。『知見の歌』は中観派の縁起と空の思想を主題とし、著者自らが得た中観の知見 (*lta ba*) を「母」「父」「兄」「息子」などの象徴表現を用いて歌 (*mgur*) の形式で綴った作品である。チャンキャ・ロルペードルジェはツォンカパ・ロサンタクパ (Tsong kha pa blo bzang grags pa: 1357–1419) の伝統を継承するゲルク派の学僧であり、当然ながら『知見の歌』は同派の思想的立場を色濃く反映したものとなっているが、それにもかかわらず、この歌は宗派の垣根を越えて、チベットで広く読まれてきた。『知見の歌』はチベット中観思想と文学の関係、並びにチベットにおける宗派意識の問題の二点を研究する上で重要な資料となる作品である。

本稿では作品の概要を提示した後、註釈その他の関連文献が執筆された経緯について論じ、『知見の歌』研究のための基礎資料を提供する¹。

2 作品の概要

『知見の歌』はチャンキャ・ロルペードルジェによって著された全 107 詩脚 (1 詩脚は 9 音節からなる)² からなる小品であり、*lta mgur* (「知見の歌」)、*lta mgur a ma ngos 'dzin* (「知見の歌《母の認知》」)、*lta ba'i gsung mgur zab mo* (「甚深なる知見の御歌」) など様々な名称で知られる³。奥書に与えられている題目は次の通りである。

「『《母の認知》』というこだまする戯言の音の調べ (*A ma ngo shes kyi brdzun tshig brag cha'i sgra dbyangs*)』という本書は、大中観を強く信解するチャンキャ・ロルペードルジェによって、化作された究極の聖地、五台山 (*Ri bo rtse lnga*) にて説かれたものであり、筆記者は比丘ゲレク・ナムカ (*Dge legs nam mkha'*) である」⁴

この作品は空性 (*stong pa nyid*) の真実を老いたる〈母〉という隠喩によって表現し、愚かな〈息子〉である著者が長らく行方を見失っていた〈母〉を再び見出して認知 (*ngo shes*) するさまを綴っ

¹本稿を執筆するに当たって岩田啓介博士 (筑波大学・特任研究員) より教示を受けた。ここに記して謝意を表する。

²『知見の歌』は自由な歌の形式で書かれているため、通常的美文詩 (*snyan ngag*) のように、必ずしも 4 詩脚で 1 詩節が構成されるわけではない。そのため、作品の分量を詩節数ではなく詩脚数によって示した。

³本作品は 1972 年にニューデリーで出版された *Madhyamaka Text Series*, vol. 1 (*Ston thun chen mo of Mkhas-grub Dge-legs-dpal-bzan and Other Texts on Madhyamaka Philosophy*) に *lta mgur a ma ngos 'dzin* (「知見の歌《母の認知》」) という題目で収録されている他、四川省のガワ (*Rnga ba*) 県にあるゴマン僧院 (*Sgo mang dgon*) の弘法利生会 (*Bstan spel 'gro phan tshogs pa*) によって編集され、1995 年に出版されたチャンキャ全集の *Nga* 秩に *lta ba'i gsung mgur zab mo* (「甚深なる知見の御歌」) の題目で収録されている。

⁴*Lta mgur* 3b4f.: *ces a ma ngo shes kyi brdzun tshig brag cha'i sgra dbyangs 'di yang dbu ma men po la lhag par mos lcang skya rol pa'i rdo rjes sprul pa'i gnas mchog ri bo rtse lngar smras pa'i yi ge pa ni dge slong dge legs nam mkha'o ll*

ている。《母の認知》という題目が付せられているのはそのためである。以下は冒頭の 20 詩脚の和訳である。

⁵ 驚くべき甚深なる縁起の真実を
 ありのままに包み隠さず明らかにした尊師
 その恩恵は計り知れないかのお方が
 私の心の中心にいて下さいますように。[1abc]⁶

思いつきを湧き出るがままの
 二、三の言葉で語ることにしよう。[1d]

かの年老いた〈母〉を長きにわたって見捨てる
 狂った愚息である私はどうかして
 恩恵深い〈母〉と共に過ごしていながら
 見知らぬ存在であったその方の知己を間もなく得られよう⁷。
 かの縁起という〈兄〉がひそやかに語ってくれたことにより
 押し並べてそうであり、そうではないとはいかなることかと思った⁸。[2-3ab]

この多様な所取・能取は〈母〉の微笑みであり
 この生死と移ろいは〈母〉の虚言である。
 欺くことの無い〈母〉によって私は欺かれた。
 かの〈兄〉である縁起が守ってくれることを願う。[3cd-4ab]

その一方では他ならぬ年老いた〈母〉の
 恩恵により解脱することを願う。
 まさにこの所取・能取がこの通りであるならば
 三世諸仏でさえも救済する術がないのだから。[4cd-5ab]

この多様な移ろいは移ろうことの無い〈母〉の
 変容態であるからこそ解脱が可能なのである。[5cd]⁹

⁵ ティチェン・テンパ・ラブギェは『知見の歌』の開始部に e ma ho (「エマホー!」) という句の存在を認めている。そして、e は方便である大楽 (thabs bde ba chen po)、ma は智慧に等しい空性 (shes rab stong pa nyid)、ho はその両者の一体化 (zung du 'jug pa) を象徴し、それによって獲得対象である果の evam (thob bya 'bras bu'i e wañ)、獲得手段である道の evam (thob byed lam gyi e wañ)、誘引手段である徴表の evam ('dren byed rtags kyi e wañ) の三つを表していると解釈する (Skal ldan bzhad byed 188.8ff.)。しかし、チャンキャ・ロールペドルジェ全集版は e ma ho の句を欠き、ジクメワンポの註釈、ミパムの註釈にも e ma ho の句に関する説明は見られない。ウェルマン・クンチョク・ギェルツェンが言うように、e ma ho の句は後代の付加なのであろう (Grub bzhi'i snying nor 237ff.)。

⁶ 『知見の歌』は必ずしも 4 詩脚で 1 詩節を構成しているのではないが、ここでは便宜的に 4 詩脚 (a, b, c, d) を 1 詩節と数える。

⁷ この詩脚 (ngo ma shes pa de shes la khad snang ngo) のみ 10 音節からなり、他の詩脚に比べて 1 音節多い不規則形となっている。

⁸ クンチョク・ジクメワンポは以下のように註釈する。Tshig sgron 3alf.: jo jo rten 'byung gi gtan tshigs la brten nas skyes pa'i rjes dpag gis **lkog tu** ste don spyi'i tshul gyis **bsnyad pa'** am bshad pa la brten nas ma brtag ma dpyad pa'i tshe **yin yin** 'dra ba la | brtags shing dpyad de btsal ba na bzung rgyu med pa'i **min min** 'dra ba rang bzhin gyis med pa **de e yin snyam mo** || (「縁起証因という〈兄〉に依拠して起こる推論がひそやかに、対象像を通じて語ってくれたことにより、すなわち、説き明かしたことに依拠して、吟味も考察も行なわない限り〔諸事物は〕押し並べてそうであるが、吟味し考察して探し求めるならば何も把握され得るものはないという意味で〔諸事物は〕押し並べてそうでなく、固有のあり方に基づいて存在しないとはいかなることかと思った」)

⁹ Lta mgur 1b1ff.: zab mo rten 'byung gi de nyid ngo mtshar || ji bzhin rjen pa ru ston pa'i bla ma || bka' drin 'khor med de snying dbus bzhugs shig || gang dran thol byung gi tshig gsum smra'o || a ma rgan mo de yun ring stor ba'i || bu chung smyon pa nga ji zhi g ltar te || a ma drin can de lhan cig 'dug pa || ngo ma shes pa de shes la

詳細な分析は別稿に譲るが、空性の隠喩である老いたる〈母〉を、縁起の隠喩である〈兄〉の助けを得て、愚息である私—ロルペードルジェ—が見出すさまが描写され、空性である〈母〉が所取・能取や生死の移ろいといった現象世界の根源にあること、その〈母〉こそが解脱の根拠となることが鮮やかに表現される。

文殊菩薩の聖地として有名な五台山（現・山西省）で著された本作品は、甚深なる縁起と空の思想についての知見（Ita ba）¹⁰を作者が自らの経験に基づいて歌で表現したものである。題目に「戯言（brdzun tshig）」とあるのは自由な文体と、大胆な象徴表現の使用のためであろう。また、同じく題目に「こだまする音の調べ（brag cha'i sgra dbyangs）」とあるのは、この作品が山中で作られたことに関係しているのかもしれない。チャンキャ・ロルペードルジェは自ら体得した中観の真実を、五台山という霊妙な空間の中で、湧き出るままに歌にしたためたのであろう。そのことが題目と奥書から窺える。

3 チャンキャ・ロルペードルジェの略歴

『知見の歌』を著したチャンキャ・ロルペードルジェは東チベットのアムド地方に生まれ、18世紀のアムド、中央チベット、漢土、モンゴルで大きな影響力を持っていた学僧である。以下に彼の略歴を記す¹¹。

1717年1月10日に涼州（Tib. Lang gru）の西部ペモ（Padmo）地区に属する遊牧区ダクカル（Brag dkar）に生まれた。4歳の時（1720年）にチャンキャ・フトクトウ（Lcang skya hu thog thu）化身の転生者¹²として認定され、ゴンルン（Dgon lung）僧院に入る。先代のガワン・ロサン・チューデン（Ngag dbang blo bzang chos ldan: 1642–1714）の弟子であったアツェ・チュージェ・ロサン・チュージン（A rtse chos rje blo bzang chos 'dzin）に師事し、7歳（1723年）の時にロサン・テンペー・ギェルツェン（Blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan）の下で優婆塞戒を受ける。

8歳の時（1724年）に雍正帝（1678–1735, 在位 1722–1735）の招聘を受けて北京に赴き、嵩祝寺（Tib. Zung gru zi）に居を構える。この時、雍正帝から「灌頂普善広慈大国師（bkwan ting phu'u shan bkwang tshi tā kau shri）」¹³の称号を受ける。

18歳（1734年）¹⁴の時、中央チベットに赴き、ダライ・ラマ7世として認定されたケルサン・ギャンツォ（Skal bzang rgya mtsho: 1708–1757）をラサに迎え入れる。20歳（1736年）の時、パ

khad snang ngo || jo jo rten 'byung des lkog tu bsnyad pas || yin yin min min de e yin snyam mo || gzung 'dzin sna tshogs 'di a ma'i 'dzum bag || skye 'chi 'pho 'gyur 'di a ma'i brdzun tshig || bslu med a ma yis kho bo bslus so || jo jo rten 'byung des skyob par re'o || nram pa gcig tu na a ma rgan mo || kho na'i drin gyis ni grol par re ste || gzung 'dzin 'di nyid ko 'di ltar yin na || dus gsum rgyal bas kyang skyob thabs mi 'dug || 'gyur ba sna tshogs 'di 'gyur med a ma'i || nram 'gyur yin pas na grol rgyu 'dug go ||

¹⁰ツォンカパの中観思想において「知見（Ita ba）」という概念は極めて重要な意味を持つ。ツォンカパは中観の知見を獲得することにより認識の転換が起こり、縁起と空の同義性を知ることが初めて可能になると考えている（根本 2016: 108ff. を参照）。チャンキャ・ロルペードルジェが『知見の歌』で表現しようとしているのは、まさにこの知見によって得られる宗教体験である。

¹¹*Sgo mang chos 'byung* 533ff. に主に依拠した。また、併せて *Ming mdzod* 529f. も参照した。

¹²ロルペードルジェはガワン・ロサン・チューデン（Ngag dbang blo bzang chos ldan: 1642–1714）の転生者であり、さらに後者はキェンラブ・タクパ・ウーセル（Mkhyen rab grags pa 'od zer: d. 1641）の転生者であると信じられている。キェンラブ・タクパ・ウーセルをチャンキャ1世と見なすならば、ロルペードルジェはチャンキャ3世であるが、ガワン・ロサン・チューデンをチャンキャ1世と見なしてロルペードルジェをチャンキャ2世とする場合もある。チャンキャ・フトクトウの転生譜とロルペードルジェの生涯に関しては Smith 2001: 133ff. に詳しく論じられている。

¹³チベット語で byams brtses kun gyi spyi bo nas dbang bskur ba'i kun mkhyen chen po（「慈悲によってあらゆる人々の頭頂から灌頂を授ける偉大なる一切智者」）という（*Sgo mang chos 'byung* 542）。

¹⁴*Ming mdzod* (529: 20) は 19歳の年とする。

ンチェン・ラマ2世ロサン・イシー (Blo bzang ye shes: 1663–1737) の下で沙弥戒と具足戒を受け、イシー・テンペー・ドゥンメ (Ye shes bstan pa'i sgron me) の法名を授かる。

20歳 (1736年) の時に北京に戻り、乾隆帝 (1711–99, 在位 1735–1796) に面会する。また、この頃ティチェン・トゥルク・ロサン・テンペーニマ (Khri chen sprul sku blo bzang bstan pa'i nyi ma) の下で顕教と密教を学び、ペルサン・チュージェ (Dpal bzang chos rje) の下で文法学・暦学・韻律学などを広く学ぶ。

25歳 (1739年) の時、乾隆帝の命を受けて大蔵経テングル (論書部) のモンゴル語訳の監修に携わり、翌年 (1740年) 3月にそれを完成させる。同じ年に北京に雍和宮 (Tib. Dga' ldan byin chags gling) をはじめとするチベット様式の僧院を創設する。また、この時期には乾隆帝にチベット語を教え、説法を行なっている。

36歳 (1749年) の時、東チベットに行き、ジャムヤンシェーパ ('Jam dbyangs bzhad pa) 2世クンチョク・ジクメワンポ (Dkon mchog 'jigs med dbang po: 1728–1791) に具足戒を授ける。また、トゥカン・ロサン・チューキ・ニマ (Thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma: 1737–1802) に沙弥戒を授ける。

41歳 (1757年) の時、ダライ・ラマ7世転生者の探索のため中央チベットに赴き、ジャンペル・ギャンツォ ('Jam dpal rgya mtsho: 1758–1804) をダライ・ラマ8世として認定する。51歳 (1767年) の時、五台山に滞在し、様々な神秘的体験をする。『知見の歌』はこの時に書かれたものである。

55歳 (1771年) の時、乾隆帝の命により大蔵経カンギル (仏説部) 満州語訳の事業を完成させる。70歳 (1786年) 4月2日、五台山で入滅する。

チャンキャ・ロールペドルジェには多くの著作があり、仏教内外の各学派の教義を論じた学説綱要書『仏説の須弥山の綺麗な飾り (Thub bstan lhun po'i mdzes rgyan)』、仏教学 (内明) を含む学問体系 (五明) の用語集『賢者の源 (Mkhas pa'i 'byung gnas)』、文殊菩薩の聖地として知られる五台山について記述した『清涼山志 (Ri bo dwangs bsil)』¹⁵ などが有名である。

4 『知見の歌』の著作経緯

『知見の歌』は著者が51歳 (1767年) の時、五台山にて書かれたものである。トゥカン・ロサン・チューキ・ニマによって書かれたチャンキャ・ロールペドルジェ伝には、著作の経緯に関する以下のような記述が見出される。

「また、ある晩に夢の中で、山高の学者帽をかぶり、高座の上に座している威厳のある容貌をした師匠が剣を授けて下さるのを見た〔師ロールペドルジェは〕仰っている。これが尊者ツォンカパ大師による特別な加持の験であることは疑いない。

尊者ツォンカパ大師は事実としては (don dngos gnas la) 尊者文殊と同一であるのだが、別様に解釈されるべき意味を持つ所化の者達にとっての見え方としては (drang don gdul bya'i snang ngor)、岩山と雪山の狭間にある僻地に居住し、[1] 不可分である諸天と〔自身の〕尊師に対して請願を行ない、[2] 力強く〔福德の〕積聚と〔罪業の〕浄化に励み、[3] 偉大なる典籍をつぶさに考察するという三つのことをまとめて行なう実践行に依拠して、中観の知見を新たに見出すさまをお示しになり、牟尼の中の自在者 (仏世尊) を『縁起を説いた』という点に着目して讃える『善説真髓 (縁起讃)』を著作なさった。

それに追随するように、まさにこの尊師 (ロールペドルジェ) もまた、様々な要因の集合を完備する実践行に心傾けることをなさった。これにより、甚深なる優れた中観の知見が、実に幼少の頃から心相続に新たに生まれ、既に証得したその同じものを数習することにより、修

¹⁵ 『清涼山志』については西岡 2008 が詳しく論じている。

所成の経験が現れた。その時、牟尼の中の自在者である説法師（仏世尊）、ナーガールジュナ（Nāgārjuna）父子、尊師〔ツォンカパ〕に、自らの体験を言葉で表現した歌の調べを捧げ物として献上なさったのである。その歌は次のものである（後略）」¹⁶

この記述によると、チャンキヤ・ロルペードルジェは五台山に滞在中のある晩、夢の中でツォンカパとおぼしき威厳のある師匠から剣を授かる。この体験をきっかけとして彼は自らが体得した中観の知見を表現した歌を作り、それを釈尊、ナーガールジュナ父子（ナーガールジュナとアールヤデーヴァ）、ツォンカパに捧げた。

これはツォンカパが41歳の頃（1397年頃）に夢の中でブッダパーリタ（Buddhapālita）から加持を受けたことをきっかけとして中観思想についての疑問点を解消し、その直後に、縁起を説いた説法師である釈尊を讃える詩『縁起讃』を著したという故事をなぞったものである¹⁷。ツォンカパが『縁起讃』を著して以来、チベットの学者達は自らが体得した中観の知見を詩（snyan ngag）や歌（mgur）の形で表現するようになる。チャンキヤ・ロルペードルジェはこの伝統に従って『知見の歌』を著作し、それをツォンカパに献呈したのである。上に引用した伝記の一節はそのことを象徴的に物語っている。

5 『知見の歌』の註釈および関連文献

『知見の歌』はチベットで広く読まれた作品であり、ゲルク派内外の著者によって註釈や関連文献が書かれた。以下では『知見の歌』の註釈および関連文献を紹介する。

5.1 クンチョク・ジクメワンポ『言葉の灯火』

ジャムヤンシェーパ2世クンチョク・ジクメワンポ（Dkon mchog 'jigs med dbang po: 1728–1791）は『言葉の灯火（Tshig gi sgron me）』と題する註釈を著している。著者はチャンキヤ・ロルペードルジェの弟子の一人である。以下が『言葉の灯火』の奥書である。

「遍入金剛薩埵を本体とし、そのお名前を申し上げるのも憚られるチャンキヤ・ロルペードルジェ様の御口というパドマ蓮華から発せられた『知見の御歌』の註釈『言葉の灯火』と題する本書は、天文学や暦学などの学問分野に対して知性の働きがウトパラ蓮華の花弁のように広がるウジュムチンの国師ガワン・テンペルと、尊者ご自身の給仕長を務め、淨信と精勤と観察力が並外れた比丘ゲレク・ナムカの二者が請願するのに応じて、かの至高の尊者の御足の砂塵を頭頂に戴き論理に従って自由自在に論ずる比丘クンチョク・ジクメワンポ、別名

¹⁶Mdzes rgyan 511.13ff.: yang nub gcig mnar lam du | bla ma sku brjid bag can paṇ zhwa rne ring gsol zhing khri chen po la bzhugs pa zhig gis ral gri zhig gnang ba rmis gsungs | 'di ni rje btsun bla ma tsong kha pas byin gyis brlabs pa'i mtshan ma khyad par can du gor ma chag go || rje btsun bla ma tsong kha pa chen po don dngos gnas la rje btsun 'jam ba'i dbyangs dang gnyis su med na'ang | drang don gdul bya'i snang ngor g-yā' dang gangs kyi mtshams rnams su dben pa la bzhugs nas lha dang bla ma dbyer med la gsol ba 'debs pa dang | bsag sbyang stobs che ba la 'bad pa | gzhung chen mo rnams la zhib tu dpyod pa gsum dril du mdzad pa'i nyer len la brten nas dbu ma'i lta ba gsar du rnyed pa'i tshul mdzad nas | thub pa'i dbar po la rten 'byung gsung ba'i sgo nas bstod pa legs bshad snying po rtson par mjad pa dang rjes su mthun par | rje bla ma 'di nyid kyi kyang rgyu tshogs tshang ba'i nyams len la thugs 'grus par mdzad pa'i mthus | zab mo dbu ma'i lta ba khyad par can sku na phra mo'i dus nyid nas thugs rgyud la gsar du 'khrungs pa de nyid rtogs zin goms par byas pas sgom byung gi myong ba thon pa na | ston pa thub pa'i dbang po dang klu sgrub yab sras | rje bla ma rnams la rang gi nyams myong tshig gis mtshon par byas pa'i mgur dbyangs mchod par 'bul ba gnang ba ni 'di ltar ro ||

¹⁷この故事については根本 2016: 10ff. を参照。

ミパム・ヤンチェン・ガウエー・ドルジェによって、化作された至高の聖地、五台山の七仏堂にて著されたものであり、筆記者はガクラムパ・ロサン・ワンギェルである」¹⁸

奥書によると『言葉の灯火』はウジュムチン (u cu mu chin < üjümüčin, 烏珠穆沁) 部の国師 (gu shri < guoshi) であったガワン・テンペル (Ngag dbang bstan 'phel) と比丘ゲレク・ナムカ (Dge legs nam mkha') の二者からの請願を受けて、五台山の七仏堂 (sangs rgyas rabs bdun gyi lha khang) にて著作されたものである。この二名の内、前者は天文学と暦学に造詣の深い人物であったとされるが、それ以外の情報は奥書には記載されていない。後者はチャンキャ・ロールペードルジェの下で給仕長 (gsol dpon) を務めた人物である。

この註釈は「言葉の灯火」という題目の通り、本文の字句について逐語的な説明を与え、言葉の意味を明らかにするものである。クンチョク・ジクメワンポはチャンキャ・ロールペードルジェから直接薫陶を受けた人物であることから、『知見の歌』の本文に込められた作者の意図を探る上で、本註釈が重要な資料となることは言うまでもない。

5.2 ティチェン・テンパ・ラブギェ 『有縁の蓮華を咲かせる太陽』

次にラデン (Rwa sgreng) 2世ティチェン・テンパ・ラブギェ (Khri chen bstan pa rab rgyas: 1759–1815/16) は『我執という敵軍を滅ぼす武器《有縁の蓮華を咲かせる太陽》(Bdag 'dzin dgra dpung 'joms pa'i mtshon cha skal ldan padmo bzhad pa'i nyin byed)』という註釈を著し、『知見の歌』を密教の観点から再解釈する試みを行なっている。同註釈の趣旨はその冒頭部に示されている。

「さて、ここで一切衆生にとっての見知らぬ大親友であり、他に並ぶ者がいない、まさにかの釈迦族の王（釈尊）の教えの真髄という純金の王冠を戴き、顕密の教えを照らす至高の太陽であり、吉祥ヘールカが末世においてサフラン色の勝利の旗印（僧衣）をまとった者であるチャンキャ・ロールペードルジェが自身の御心に生じた楽空の智慧 (bde stong gi ye shes) を包み隠さず説示した《母の認知》という名で知られるまさにこの修行歌の註釈を、純然たる顕教の立場 (mdo lugs rkyang pa'i phyogs) に立つてジャムヤンシェーペー・ドルジェ〔クンチョク・ジクメワンポ〕が既に著しているが、御歌にある密意の基盤 (dgongs gzhi) そのものは密教説 (sngags lugs) にあるので、それを正しい意味に従って簡潔な言葉で註釈するならば〔以下の通りである〕」¹⁹

この記述から、ティチェン・テンパ・ラブギェはクンチョク・ジクメワンポ（ジャムヤンシェーパ2世）の註釈『言葉の灯火』を見ていたことが分かる。クンチョク・ジクメワンポは顕教の立場から同書に説かれる縁起と空の思想を解説しているが、ティチェン・テンパ・ラブギェはこの

¹⁸Tshig sgron 11b1ff.: ces khyab bdag rdo rje sems dpa'i ngo bo mtshan brjod par dka' ba lchang skya rol pa'i rdo rje'i zhal gyi padmo las 'ongs pa'i lta ba'i gsung mgur gyi 'grel pa tshig gi sgron me zhes bya ba 'di ni l skar rtsis sogs rig pa'i gnas la blo gros kyi 'jug pa utpal gyi 'dab ma ltar yangs pa u cu mu chin gu shri ngag dbang bstan 'phel dang l rje nyid kyi gsol dpon dad brtson rnam dpyod phul du byung ba dge slong dge legs nam mkha' gnyis kyi bskul ngor l rje btsun dam pa gang de'i zhabs rdul spyi bor len pa'i dge slong rig pa dang grol bar smra ba dkon mchog 'jigs med dbang po'am ming gzhan mi pham dbyangs can dga' ba'i rdo rjes sprul pa'i gnas mchog ri bo rtse lnga'i sangs rgyas rabs bdun gyi lha khang du sbyar ba'i yi ge pa ni sngags ram pa blo bzang dbang rgyal lo l l

¹⁹Skal ldan bzhad byed 187.17ff.: de la 'dir 'gro ba kun gyi ma 'dris pa'i mdza' bshes chen po mnyam med shākya'i rgyal po de nyid kyi bstan pa'i snang byed dam pa he ru ka dpal dus mthar ngur smrig gi rgyal mtshan 'chang ba lchang skya rol pa'i rdo rje gang gi thugs nyams su 'khrungs pa'i bde stong gi ye shes rjen par ston pa a ma ngos 'dzin du grags pa'i nyams mgur 'di nyid kyi 'grel pa mdo lugs rkyang pa'i phyogs su 'jam dbyangs bzhad pa'i rdo rjes bkral zin kyang l gsung mgur gyi dgongs gzhi dngos sngags lugs su 'dug gshis de don bzhin nyung ngu'i tshig gis 'grel ba la l

歌に込められているのが密教の思想であると理解し、楽空の智慧（bde stong gi ye shes）すなわち大楽と空性が一体となったものである智慧の本質を明らかにするためにこの註釈を書いている。

それゆえ、ティチェン・テンパ・ラブギェの『知見の歌』の解釈は、クンチョク・ジクメワンポによる解釈とは大きく異なる。この註釈は密教に対する正確な知識なしには読み解くことが不可能なものである。

5.3 ウェルマン・クンチョク・ギェルツェン『悲心の海』

ティチェン・テンパ・ラブギェの註釈はゲルク派内で大きな論争を引き起こしたようである。クンチョク・ジクメワンポの弟子であるウェルマン・クンチョク・ギェルツェン（Dbal mang dkon mchog rgyal mtshan: 1764–1853）は『下拙の公明正大な知という雲の中より出づる真実の教えという甘露で渦巻く悲心の海（Gyi na ba zhig gi gzu bo'i blo'i bden gtam bdud rtsir 'khyil ba'i snying rje'i rol mtsho）』を著し、論争の要点を整理してまとめた上で、自らの立場からティチェン・テンパ・ラブギェに対する批判を行なっている。『悲心の海』は全 108 フォリオに及ぶ大著である。『悲心の海』はまず論争の発端について次のような説明を与えている。

「さて、曼荼羅という大海の主であり、教法と衆生にとっての誉れある無双の守護者であるチャンキヤ・ロールペードルジェ・イシー・テンペー・ドゥンメ様がお書きになった『知見の御歌』について、クンキェン〔ジャムヤンシェーパ〕2世マハーパンディタ・ジクメ足下は註釈『言葉の灯火』をお作りになられた。

それに対し、クンキェン・ジャムヤンシェーパ〔1世〕の直弟子で〔大楽と空性が〕一体となった身を体得したティチェン・ガワン・チョクデンの転生者、ラデン・ティチェン・ドルジェチャンというお名前で太陽や月のように知れ渡っているロサン・テンパ・タルギェは『本当の意味はこの通りに説明せねばならないはずである』と考えて『有縁者という蓮華を咲かせる太陽』をお作りになった。

それを受けて、後に名前を挙げる、タシキル僧院の三名の教理論者をはじめとする者達〔が現れ〕、ある者は批判を行ない、またある者は『字義通りの意味を君は理解していない』といったことを論じたのだが、実際には〔相手側の〕正しさを認めたことになる回答群（bden kha byin pa'i lan le tshan）が四、五回起こったのであった。それについて学生達が暇に任せて言いたい放題に（kha lag gang khom gyis）註記を付けた。彼ら自身の名前の一部を添える韻文を記した数篇の紙原稿の束を、筆記者ラブチャムパ・プニヤイチェン（Rab 'byams pa bu nyai can）が一つにまとめて筆写した。そのようなものがあるという噂話が、ティチェン上人の多くの弟子達を驚かせるといった騒ぎを巻き起こしたと〔私は〕伝え聞いている」²⁰

この記述によれば、ティチェン・テンパ・ラブギェの註釈が世に現れると、ラブラン・タシキル僧院の学僧達は反発し、四、五回に及ぶ批判を行なった。それらは批判の体をなしておらず、か

²⁰Snying rje'i rol mtsho 1b4ff.: de yang dkyil 'khor rgya mtsho'i mnga' bdag bstan 'gro'i dpal mgon zla med lchang skya rol pa'i rdo rje ye shes bstan pa'i sgron me dpal bzang pos mdzas pa'i lta ba'i gsung mgur la kun mkhyen sku 'phreng gnyis pa ma hā paṇḍi ta 'jigs med zhabs kyis 'grel ba tshig gi sgron me mdzad l de la kun mkhyen 'jam dbyangs bzhad pa'i dngos slob zung 'jug sku brnyes khri chen ngag dbang mchog ldan gyi sprul pa'i sku rwa sgren khri chen rdo rje 'chang zhes mtshan nyi zla ltar grags pa blo bzang bstan pa rab rgyas nas don dngos 'di ltar bkral dgos zhes 'grel ba skal ldan pad mo bzhad pa'i nyin byed ces bya ba mdzad l de la bkra shis 'khyil gyi lung rigs pa 'og nas ming zur thon pa gsum sogs 'ga' zhig gis dgag pa dang 'ga' zhig gis tshig zin la khyod kyis ha ma go ba yin lta bu smras kyang l don la bden kha byin pa'i lan le tshan bzhi lnga tsam byung ba la slob gnyer ba kha lag gang khom gyis mchan btad l rang rang gi ming zur dang bcas tshigs bcad bris pa'i shog dril kha shas yod pa yig mkhan rab byams pa bu nyai can gyis phyogs gcig tu bsgrigs nas bris l de 'dra yod pa'i gtam des khri chen mchog gi slob ma du mas ha las pa lta bu'i 'ur zing byed pa thos te l

えってティチェン・テンパ・ラブギェの正しさを証明する結果となるものに過ぎなかったが、学生達は彼らの批判に関する註記 (mchan) を作成し、それをプニヤイチェン (Bu nyai can) なる者がまとめて筆記した。そのような文書が作成されたという噂話はティチェン・テンパ・ラブギェの弟子達のもとにまで伝わったという。『悲心の海』は続けて次のような記述を与える。

「しかし、元の原稿を探し求めても、書き手はほとんど距離的にも時間的にも〔今の私から〕隔絶しているため、中にあった韻文のほとんどが散逸し、散文も多くが散逸してしまい、要約して記した断片のみしか手に入らない。後に『夜叉の地方 (gnod sbyin phyogs) に住むケーパ (Mkhas pa, 「賢者」) の名を持つある教理博士が記した』という〔記載〕がある『火のヤントラ (Me'i 'khrul 'khor)』という批判的回答書 (dgag lan) や、さらにまた『ウという地 (u zhes pa'i yul) に住むマティ (Ma ti) という名を持つある教理博士が記した』という〔記載〕がある『天の雷 (Gnam lcags thog mda')』という批判的回答書を見た。そこで、本書ではそれらが妥当するか否かについての判定を公明正大な心で提示することにしよう」²¹

ウェルマン・クンチョク・ギェルツェンは、プニヤイチェンによって編集された批判文書の存在を知っていたが、実際にそれを見ることはできなかったようである。彼自身が参照できたのはケーパ (Mkhas pa) という名の作者による批判書『火の輪』、およびマティ (Ma ti) という名の作者による批判書『天の雷』の二つである。彼はこの二つの文献に記されたティチェン・テンパ・ラブギェに対する批判の当否を検討するために『悲心の海』を著作している。その内容は『知見の歌』の解釈にとどまらず、顕教と密教を含めた様々な領域に関わるものである。

5.4 カトク・ゲツェ・マハーパンディタ『ゾクチェンに関する疑念の払拭』

『知見の歌』はゲルク派とは異なる教義体系を持つニンマ派の中でも読まれている。ニンマ派のカトク・ゲツェ・マハーパンディタ・ギェルメ・ツェワン・チョクドゥプ (Kaḥ thog dge rtse mahāpaṇḍita 'gyur med tshe dbang mchog grub: 1761–1829) は『ゾクチェンに関する疑念を払拭する善説《金の匙》(Rdzogs pa chen po la dogs pa sel ba'i legs bshad gser gyi thur ma)』を著し、『知見の歌』の思想をニンマ派のゾクチェン (rdzogs chen, 「大究竟」) 説の立場から解釈している²²。

カトク・ゲツェ・マハーパンディタが議論の出発点としているのは、ゾクチェンの思想が言及される『知見の歌』の一節である。彼はその一節を引用して次のように述べている。

「さてそこで『知見の歌』に〔次のように〕説かれる。

サキャ派、ニンマ派、カルマ派、ドゥク派の多くの学識ある成就者は
光り輝く空性であり把握し得ない自証智
本初より清浄であり無功用なる普賢の尊顔
作為性を離れた俱生のマハームドラー
有でもなく無でもないという一切の承認事項を離れたあり方など
多種多様な表現形態をとる誇らしげな話を声高に語るけれども
〔それらが〕ありのままの実相であるならば構わない。
だが、それが指し示す対象は一体何なのであろうか。

²¹ *Snying rje'i rol mtsho* 2b2ff.: sngar gyi dpe rnam rtsad bcad kyang bri mkhan phal cher yul dus kyis bskal bas nang gi tshigs bcad phal cher dang tshig lhug yang mang bo dor te khu bsdu byas nas bris pa'i dum bu zhi las ma rnyed | phis su gnod sbyin phyogs na gnas pa'i mkhas pa'i ming can lung rigs rab 'byams pa zhi gis bris | zhes yod pa'i dgag lan me'i 'khrul 'khor zer ba zhi dang | slar yang u zhes pa'i yul na gnas pa'i ma ti'i ming can lung rigs rab 'byams pa zhi gis bris | zhes yod pa'i dgag lan gnam lcags thog mda' zer ba zhi mthong nas 'dir de rnam 'thad mi 'thad kyi nam gzahag gzu bo'i blos dgod par bya'o ||

²² 『ゾクチェンに関する疑念の払拭』については Makidono (2016: 202ff.) による論考がある。

サキヤ派やカギュ派などのお考えに関してはひとまず置いておき、ここで本性としての大いなる完成（rang bzhin rdzogs pa chen po）の見解に関して事の真相を幾許か申し上げるならば〔次の通りである〕」²³

ここで引用される詩では、チベットのサキヤ派、ニンマ派、カルマ・カギュ派、ドゥク・カギュ派のそれぞれの思想が言及される。カトク・ゲツェ・マハーパンディタはサキヤ派やカギュ派などの見解については取り上げず、彼自身が信奉するニンマ派のゾクチェンの思想について論ずることを宣言している。

ゾクチェンの思想を説くニンマ派が究極の真実と考えるのは「本初より清浄であり無功用なる普賢の尊顔（ka dag lhun grub kyi kun bzang rang zhal）」である。カトク・ゲツェ・マハーパンディタは『知見の歌』の思想もゾクチェンに一致するはずであるという見解に立ち、自らのゾクチェン解釈を展開している。

5.5 ミパム・ギャンツォ『小註』

ニンマ派の伝統に属するミパム・ジャムヤン・ナムギェル・ギャンツォ（Mi pham 'jam dbyangs rnam rgyal rgya mtsho: 1846–1912）もまた『知見の歌』の註釈を著している。この註釈は題目を持たず、奥書では単に「小註（'grel chung）」と呼称される。以下がその奥書である。

「本書は遍入金剛薩埵ジャムヤン・ケンツェー・ワンポのおみ足の蓮華が頭頂に触れる機縁を得たシヨンヌ・ロドゥ・ティメー（ミパムの別名）という者が27歳の壬申年の吉日に書き記したものである。幸が広がることを願う。なお、この小註（'grel chung）はギェルツァプ・リンポチェが出版なさりたいというご意向に従って、ミパム・リンポチェの直筆の手書き原稿（phyag bris dngos）に基づいて、比丘ツェワン・リクジンがシェチェン山中にて清書して書写したものである。これによりあらゆる方角と時代にわたって善となり吉祥となるように」²⁴

この記述によれば『小註』はミパムが27歳の時（1872年）に自身の手で書かれたものである。19世紀に起こったリメー（ris med, 「宗派折衷」）運動²⁵の提唱者ジャムヤン・ケンツェー・ワンポ（'Jam dbyangs mkhyen brtse'i dbang po: 1820–1892）の弟子であるミパムはゾクチェン解釈に中観帰謬論証派の空の見解を導入するなど、特定の立場にとらわれない自由な思想を展開した。『小註』はゾクチェンの観点から『知見の歌』を読み解くと共に、ツォンカパの見解についても独自の解釈を展開するものであり、ミパム独自の発想が詰め込まれた註釈書である。

²³Rdzogs chen dogs sel 2a1ff. (citing *Lta mgur* 2b4f.): de la kta ba'i mgur du l sa rnying kar 'brug gi mkhas pa mang pos l l gsal stong 'dzin med kyi rang gi rig pa l l ka dag lhun grub kyi kun bzang rang zhal l l ma bcos lhan skyes kyi phyag rgya chen po l l yod min med min gyi khas blang bral sogs l l sna tshogs tha snyad kyi zhal pho sgrogs kyang l l gshis lugs thig po zhig yin na legs te l l mdzub mo 'dzugs sa de ci zhig yin ang l l gsungs pa sa skya dang bka' brgyud sogs kyi bzhed pa'i skor re zhig bzhag nas 'dir rang bzhin rdzogs pa chen po'i lta ba'i skor yin lugs cung zad gsol na l

²⁴'Grel chung 29.17ff.: ces pa 'di ni khyab bdag rdo rje 'chang 'jam dbyangs mkhyen brtse'i dbang po'i zhabs pad spyi bor reg pa'i skal bzang thob pa'i gzhon nu blo gros dri med zhes bya bas rang lo nyer bdun pa chu sprel lo'i zla tshes dge ba'i dus su bris pa dge legs 'phel l l 'grel chung 'di'ang rgyal tshab rin po ches spar la 'god pa'i dgongs bzhed bzhin mi pham rin po che'i phyag bris dngos las shakya'i dge slong tshe dbang rig 'dzin gyis zhe chen ri khrod du dag par zhal bshus pa 'dis phyogs dus kun tu dge zhing bkra shis par gyur cig l l

²⁵19世紀チベットにおけるリメー運動については Smith 2001: 235ff. および Deroche 2012 を参照。

5.6 現代の諸註釈

最後に『知見の歌』に対する現代の諸註釈について紹介する。ゲルク派のデブン僧院ゴマン学堂の第71代学堂長とデブン僧院座主を歴任したテンパ・テンジン（Bstan pa bstan 'dzin: 1917–2007）師の著作集には三種の註釈が収録されている。

第一の『知見をめぐる独自の修行歌「母の認知」の内容梗概《要点の直線》（*Lta ba'i nyams mgur thun mong ma yin pa a ma ngo shes kyi bsdu don gnad kyi drang thig*）』（著作年不明）は『知見の歌』の科文（sa bcad）を与え、内容構成を示すものである。第二の『知見をめぐる独自の修行歌「母の認知」の註釈《四大学説という大切な宝》（*Lta ba'i nyams mgur thun mong ma yin pa a ma ngo shes kyi rnam bshad grub mtha' bzhi'i snying nor*）』（1983年）は毘婆沙師・経量部・唯識派・中観派の四学派の学説と、チベットのニンマ派、サキャ派、カギュ派、ゲルク派の各宗派の見解について概説を与えた後、『知見の歌』本文について詳細な説明を与える浩瀚な註釈書である。第三の『知見をめぐる修行歌という善道を明るくする灯明をさらに明るくする内容梗概《灯明》（*Lta ba'i nyams mgur lam bzang gsal ba'i sgron me'i bsdu don yang gsal sgron me*）』（1999年）は第一の註釈と同じく『知見の歌』の科文を与える簡潔な註釈である。

さらに、2006年に刊行された雑誌『西藏佛教（*Bod ljongs nang bstan*）』第40号にペンノル（Spen nor）氏による註釈『知見の歌「母の認知」の註釈《略解》（*Lta mgur a ma ngos 'dzin gyi 'grel pa nyung ngu rnam gsal*）』（2005年）が収録されている。『知見の歌』本文に対する逐語的な解釈を与える註釈である。現在でも『知見の歌』が高く注目されていることを示す証左である。

6 結語

『知見の歌』はチベット仏教史において特異の位置を占める作品である。論理学とサンスクリット由来の美文詩を重視するゲルク派の伝統において、必ずしも歌（mgur）という形式は彼らの思想を表現するための主要な手段ではなかった。ところが、チャンキャ・ロールペドルジェはツォンカパの『縁起讃』に着想を得て、自らが得た中観の知見（lta ba）を自由な歌の形式で綴り、現象世界の根源である空性を老いたる〈母〉という隠喩によって語る方法により、従来のゲルク派になかった独自の表現を模索した。象徴表現の多用ゆえか『知見の歌』はゲルク派内外で様々な解釈を生み出し、論争をもたらした。ゲルク派のティチェン・テンパ・ラブギェは密教の観点から『知見の歌』を解釈し、ウェルマン・クンチョク・ギェルツェンによって批判された。また、ニンマ派のカトク・ゲツェ・マハーパンディタとミパム・ジャムヤン・ナムギェル・ギャンツォは『知見の歌』をゾクチェン思想の観点から解釈する。このように多種多様な解釈を生み出す可能性を秘めた作品である『知見の歌』は、18世紀以降のチベットにおける宗派間の対立と融和の実情を明らかにする上で極めて重要な資料となる。今後は諸註釈を活用しながら『知見の歌』の内容分析を行ない、チベット中観思想と文学の関係、並びに18世紀以降のチベットにおける宗派意識の問題について多角的な視点から研究を進めることにしたい。

略号と文献

(1) チベット語文献

Skal ldan bzhad byed Bdag 'dzin dgra dpung 'joms pa'i mtshon cha skal ldan padmo bzhad pa'i nyin byed (Khri chen bstan pa rab rgyas). In *Blo bzang dgongs rgyan mu tig phreng mdzes deb bzhi bcu pa* (pp. 187–205). Mundgod: Drepung Loseling Educational Society. 1999.

Grub bzhi'i snying nor *Lta ba'i nyams mgur thun mong ma yin pa a ma ngo shes kyi rnam bshad grub mtha' bzhi'i snying nor* (Bstan pa bstan 'dzin): In *Gsung rtsom phyogs bsgrigs mu tig do shal*, vol. 1. Mundgod:

Drepung Gomang Library. 2004.

'Grel chung *Lta mgur 'grel pa* (Mi pham 'jam dbyangs nam rgyal rgya mtsho): *Mi pham gsung 'bum las gzhung 'grel skor*. Za. Khreng tu'u: 'Jam dpal dhī yig ser po'i dpe skrun tshogs pa. 2008.

Sgo mang chos 'byung *Chos sde chen po dpal ldan 'bras spungs bkra shis sgo mang grwa tshang gi chos 'byung chos dung g-yas su 'khyil ba'i sgra dbyangs* (Bstan pa bstan 'dzin). Mundgod: Drepung Gomang Library. 2003.

Snying rje'i rol mtsho *Gyi na ba zhi gi gzu bo'i blo'i bden gtam bdud rtsir 'khyil ba'i snying rje'i rol mtsho* (Dbal mang dkon mchog rgyal mtshan): Dga' ldan chos 'khor gling ed. Cha.

Lta mgur *A ma ngo shes kyi brdzun tshig brag cha'i sgra dbyangs* (Lcang skya rol pa'i rdo rje): *Lcang skya rol pa'i rdo rje'i gsung 'bum*. Nga. Beijing: Krung go bod brgyud mtho rim nang bstan slob gling nang bstan zhib 'jug khang. 1995.

Ming mdzod *Gangs can mkhas grub rim byon ming mdzod* [雪域歴代名人辞典]. Grags pa 'byung gnas and Blo bzang mkhas grub (eds.). Lanzhou: Kan su'u mi rigs dpe skrun khang. 1992.

Tshig sgron *Lta ba'i gsung mgur gyi 'grel pa tshig gi sgron me* (Dkon mchog 'jigs med dbang po): Bkra shis 'khyil ed. Ja.

Mdzes rgyan *Khyab bdag rdo rje sems dpa'i ngo bo dpal ldan bla ma dam pa ye shes bstan pa'i sgron me dpal bzang po'i rnam par thar pa mdo tsam brjod pa dge ldan bstan pa'i mdzes rgyan* (Thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma): *Lcang skya rol pa'i rdo rje'i rnam thar*. Lanzhou: Kan su'u mi rigs dpe skrun khang. 1989.

Rdzogs chen dogs sel *Rdzogs pa chen po la dogs pa sel ba'i legs bshad gser gyi thur ma* (Kaḥ thog dge rtse mahāpaṇḍita 'gyur med tshe dbang mchog grub): Dge rtse ma hā paṇḍi ta'i gsung 'bum. Cha. Khreng tu'u: dmangs khrod dpe dkon sdud sgrig khang. 2001.

(2) 欧文・和文資料

Deroche 2012 Deroche, Marc-Henri. 「チベットにおける折衷主義の価値—19世紀の Ris med 運動に関する研究—」『日本西藏学会々報』58: 15–27.

Makidono 2002 Makidono, Tomoko. *Dge-rtse Mahāpaṇḍita's Great Middle Way of Other-Emptiness: A Study of the Kaḥ-thog Dge-rtse Mahāpaṇḍita 'Gyur-med-tshe-dbang-mchog-grub's (1761–1829) Interpretation of the Doctrine of the Great Madhyamaka of Other-Emptiness* (gzhan stong dbu ma chen po). Tokyo: Sankibo Busshorin.

Smith 2001 Smith, E.G. *Among Tibetan Texts, History & Literature of the Himalayan Plateau*. Boston: Wisdom Publications.

西岡 2008 西岡祖秀 「チャンキヤラマ二世の蔵文『清涼山志』」『印度学仏教学研究』57-1: 136 (437)–142 (431).

根本 2016 根本裕史 『ツォンカパの思想と文学—縁起讃を読む—』平楽寺書店

(ねもと ひろし、広島大学 [インド哲学])

An introduction to the study of Lcang skya rol pa'i rdo rje's *Lta mgur*

Hiroshi Nemoto

Lcang skya rol pa'i rdo rje's (1717–1786) *Lta mgur*, a collection of songs on the correct view, is a short but seminal work that expresses the idea of emptiness and dependent origination. A characteristic feature of the *Lta mgur* is the frequent usage of metaphors. Throughout the work, the author uses the metaphor of “old mother” (*a ma rgan mo*) to describe emptiness, and that of “brother” (*jo jo*) to describe dependent origination; the author himself is described metaphorically as “mad little son” (*bu chung smyon pa*). The *Lta mgur* provides a vivid description of the process by which the author recognizes (*ngo shes*) his missing mother, i.e., emptiness, with the assistance of his brother, i.e., the reasoning of dependent origination.

The *Lta mgur* was composed in 1767 CE when Lcang skya rol pa'i rdo rje was fifty-one years old and staying at Mt. Wutai (*Ri bo rtse lnga*). Shortly after that, several commentaries were written by his successors belonging to both Dge lugs pa and non-Dge lugs pa schools, each from different viewpoints. First, Dkon mchog 'jigs med dbang po (1728–1791), one of Lcang skya rol pa'i rdo rje's disciples, composed a commentary from the viewpoint of Madhyamaka philosophy. Then, another Dge lugs pa scholar, Khri chen bstan pa rab rgyas (1759–1815/16) interpreted the *Lta mgur* from the perspective of Tantra, and hence was criticized by Dbal mang dkon mchog rgyal mtshan (1764–1853). Furthermore, two commentaries on the *Lta mgur* were written by Rnying ma pa scholars: Kaḥ thog dge rtse mahāpaṇḍita 'gyur med tshe dbang mchog grub (1761–1829) believed that the idea underlying the *Lta mgur* was none other than “Great Perfection” (*rdzogs chen*), while Mi pham 'jam dbyangs rnam rgyal rgya mtsho (1846–1912) analyzed the same text in the context of the non-sectarian movement (*ris med*).

Thus, it is interesting to observe that, although the author himself belongs to Dge lugs pa, scholars both inside and outside that tradition accept his *Lta mgur*. The abundant usage of symbolic expressions has allowed the *Lta mgur* to be interpreted diversely.